

47. 関節リウマチにおける呼吸器病変の存在パターンと進行因子

内科学（リウマチ・膠原病）

田中彩絵, 高村雄太, 宮尾智之, 山崎龍太郎, 新井聡子, 大和田高義, 前澤玲華, 有馬雅史, 倉沢和宏

【背景】関節リウマチ（RA）の肺病変は多彩で、患者の治療方針や生命予後に関連する重要な関節外病変である。生物学的製剤（Bio）投与下 RA 患者における肺病変の新規出現や悪化に関連する危険因子について検討した。

【方法】当科の RA 患者で Bio 投与前後に胸部 HRCT を施行した 208 例を対象とした。投与前の CT 所見を 20 の病変に分類し、さらに間質性病変、結節性病変、気道病変、その他の 4 つに分類した。それぞれの病変の Bio 投与後の変化とそれに関連するファクターを検討した。

【結果】208 例の背景は女性 144 名（69.2%）、平均年齢 59.2 歳、罹病期間 7.9 年、抗 CCP 抗体、リウマトイド因子の陽性率は 80% を超えていた。TNF 阻害剤の導入が 84.1%、メトトレキサート（MTX）の使用は 65.3%、ステロイドの使用は 75.4% であった。Bio 投与前の CT で 146 名（70.2%）に異常所見を認めた。病変は間質性病変 38.9%、結節性病変 21.6%、気道病変 55.3%、気道病変は異常所見を認めた患者の大多数で合併していた。2 回目の CT 施行までの期間は平均 3.26 年で画像所見の新規出現・悪化の危険因子として高齢、高齢発症、既存の肺病変、気道病変が同定された。MTX は肺病変の悪化には関連しなかった。9 名が呼吸不全で死亡し、既存の肺病変、特に reticular pattern, honeycomb, bronchiectasis がその危険因子であった。

【結論】Bio 投与下で画像所見の新規出現・悪化は 43% の患者で認められた。既存の肺病変、特に気道病変のある患者は画像所見の新規出現・悪化に注意すべきである。

48. 当科モモアレルギー症例におけるモモアレルゲンコンポーネント測定の有用性

小児科学

安藤裕輔, 宮本 学, 加藤正也, 中山元子, 福田啓伸, 吉原重美

【背景】果実アレルギーには、即時型アレルギー（Immediate Allergy, 以下 IA）、花粉-食物アレルギー症候群（Pollen-Food Allergy Syndrome, 以下 PFAS）、食物依存性運動誘発アナフィラキシー（Food-Dependent Exercise-Induced Anaphylaxis, 以下 FDEIA）があり、各々でアレルゲンコンポーネントが異なることが報告されている。

【目的】モモアレルゲンコンポーネント特異的 IgE を測定し、病態および症状を比較検討する。

【対象】2012 年から 2017 年に当科を受診し、症状誘発歴及び検査結果からモモアレルギーと診断した小児期から青年期の 27 症例をアナフィラキシー群（IA：5 例, FDEIA：8 例）と PFAS 群（14 例）の 2 群に割り付けた。

【方法】モモ粗抗原, Pru p 1, Pru p 2, Pru p 3, Pru p 4, Pru p 7, 花粉特異的 IgE をイムノキャップ™ により測定する。

【結果】2 群間の性別や採血時年齢に差を認めなかった。モモ粗抗原特異的 IgE, Pru p 1, Pru p 4, ハンノキ特異的 IgE は PFAS 群で有意に高値を示した。Pru p 7 はアナフィラキシー群で有意に高値を示した。

【考察】Pru p 7 は成人において重症モモアレルギーに関連することを報告されている。本検討は小児期から青年期を対象としており、より低年齢においても Pru p 7 が重症モモアレルギー症例において高値を示す可能性が示唆された。また、Pru p 1 と Pru p 4 は成人において口腔アレルギー症状に関連すると報告されている。本検討では、PFAS と Pru p 1, Pru p 4 の関連が低年齢において示唆された。モモ PFAS の原因花粉として、シラカンバ花粉と同じカバノキ科に属するハンノキ花粉が関連する可能性が考えられた。

【結論】小児期から青年期のモモアレルギー症例において、モモアレルゲンコンポーネント測定は症状の重症度および症状の予測に有用であることが示唆された。